①立教169年(平成18年/2006年)10月21日　第45巻 第10号

かさおか

発行所
天理教笠岡大教会
かさおか編集掛
笠岡市用之江377
郵便番号714-0066
(0865)
電話 66−1311
FAX 66−1314

一年間を通しておぢばを賑やかにしよう

1．毎月一千人のおぢばがえり

1．五十万軒にをいがけとおさづけの取次

立教169年
10月号

布教所長夫妻成人研修会

出発点として

上下分教会　天領布教所長
田中　俊道

去る九月二十二日～二十三日に大教会で布教所長夫妻成人研修会があった。二年前に父より布教所を引き継いだので、今回が初めての参加であった。第一印象は、参加されている先生方が皆大先輩の方々ばかりで、正に現代社会におけるあらゆる組織とお道も同様な現状で、今回のテーマ「後継者の育成」にピッタリだなと感じた。

　私は本年の教祖百二十年祭に向けて、何か一歩でも前進させて頂こうと、昨年より教会への朝づとめの日参の心定めをさせて頂き、実行している。今の旬に親神様は親心から、私にとって人生最大の節、すなわち事情という形をお見せ下さいました。

　今日まで四十五年間生きてきて、色々な人々との出会い(その中には精神世界の方々もありました)。色々な場所(海外も含め)に行かせて頂き、様々な経験を積んできました。時には行政を相手に住民運動を起こしたこともありました。それらの経験の上に今があり、やりたい事とやりたくない事。そして離したいものと離したくないもの。それが思い通りにならなくて、大きな流れの中で一生懸命もがきながら一心不乱に走り続けてきました。今年に入り今まで自分が大切だと思い込んで守り続けてきたもの。そのすべてを失うという事態に遭遇し絶望のドン底へと突き落されてしまいました。そんな私に手を差し伸べ、支えて下さりましたのは、会長様ご夫妻、そして大事な仲間たちでした。お陰により、そんな中でも再び希望の光を見い出すことが出来ました。そして改めて、今自分が何故この世に生まれてきたのか？何をすべきか？が段々と明確になってまいりました。

　このたびの研修会に参加させて頂き、プログラムの中で最も強烈に印象に残ったのは、明生分教会長の福西秀夫先生の講話でした。先生はまさに、日々の生活の中にお道の教え自然に実践されている方だと思いました。特に「因縁は心が作ってきたものだから、おつくしやおつとめをしても因縁は切れない。心が大事なんだ。自分の性質、性格を変えることこそ運命を変えることができるのだ。心使いが種まきである。喜べないことを喜ぶから因縁を切って頂けるのだ。そしてこの世の中は人間が喜ぶように作られているのだから、神様は凄い!!と感動すること、それが大事で、毎日、毎日、感動して感謝すること。その感動する姿を見て子供たちがついて来るのだ。」と。

　何故自分が、今この時期にこの研修会に参加するように声が掛ったのかが解った気がした。そして、今年を出発点として、再びトライとチャレンジの日々が始まるのである。

学ぶ心を忘れずに

多古浦分教会　大芦布教所長夫人
余村　八重美

　百二十年祭残りわずかな時、自分のことが一生懸命で、布教所のことが何もできなかった私が、少しでも勉強させていただきたいと大教会に行かせていただきました。

　講師の福西先生のすばらしい講話を聞かせていただきました。

　先生は、二十一年に天理で生まれられ、教会の隣に家があり、学校が終わると、ランドセルを家に置いて、毎日の様に教会に遊びに行かれたそうです。二十才のころ、修養科に行かれ、初めて教理を聞かれ、教理のすばらしさを知って、一段と大好きになったと話されました。

　私は教会で育てていただいても、そんな喜びはあったのか？してもらうのがあたりまえになっている自分が、はずかしくなりました。

　二十四才で、東大阪に洋品店を開店され、お客

さんに天理教の話をされ、身上の話を聞かれると、店を閉めてから、おたすけに歩かれました。結核菌が脳の中にはいり、脳内結核の子供さんのおたすけにかかられた時、なかなか守護いただけず、大阪から歩いておぢば帰りをされた時、一度運べば一度の理、二度運べば二度の理とつとめられる中、おやさまの自分の子供を引き替えに、黒ぼうそうの子供を助けられたひながたを思いだされ、自分の子供を引き代えにと神殿に座られましたが、自分の子の顔が浮び、ただ涙を流され帰られたそうです。母さんに、自分の思いを話されお願いできなかったことを御詫びされたそうです。今子供さんは成人され、車イスですが元気に生活されているそうです。

　私達は人を助けることはできないけど、助けたいと思う心があれば、行動におこす、行動がなければ、神助けようがないと教えて下さいました。

　先生が、お話の中で、「主人の心根に心をそわす」と言われ説明をして下さいました。私自身心をそわすことができず、教会にも迷惑をかけ、信者さんや私の子供にも、大変な思いをさせてきました。年祭中に気づかせていただいたことを喜びに、自分のいんねんを自覚し夫婦、子供共々、お道の上で、においがけおたすけに歩かせていただき、これから先、信者さん方と共に、感謝、つつしみ、たすけ合いの精神で、陽気な布教所にさせて頂き、頑張ろうと思っております。

　これからは、日々、教会の会長様、奥様に学ばせて頂き、地域の皆様に陽気な天理教のにおいがけにはげみたいと思います。

　常に学ぶ心を忘れずにいきたいと思いますので、いたらない私ですが、これからもよろしくご指導お願い申し上げます。

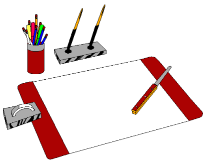
　本当にすばらしい場を与えて頂き、ありがとうございました。

・原・稿・募・集・

内　容　①小随筆　②教会・布教所の独自の活動の紹介
③俳句・和歌・川柳　④教会行事開催後の報告記事 等々

字　数　１０００字前後（８００字～１２００字）
題名・所属教会名・氏名を明記して下さい。
俳句等は１句からでも結構です。

寄稿先　下記、大教会内『かさおか』編集掛宛ドシドシご寄稿下さい。



郵　便：〒714-0066 岡山県笠岡市用之江３７７
ＦＡＸ：０８６５－６６－１３１４
メール：tenkasa@kcv.ne.jp
尚、原稿はお返し致しませんので、予めご了承下さい。

談話室

教祖年祭の想い出　その四

神村分教会前会長　下田輝夫

造園班について庭の方ばかりしていた私ですが、其の間にやかたの普請は着々と進み、昭和三十年十二月には第一期工事として、真東棟から東左四棟まで、見事に完成し教外へ向けて披露されました。昭和三十一年一月二十六日から二月十八日までの教祖七十年祭には、献灯がつけられ夜の美しさは目を見張るばかり、誰云うとなく龍宮城のようだと、実に見事な立派な景観でした。二十六日の夜真東棟東側の広場で、各流派による薪能が催されましたが、この時私は初めて能と云うものを見させて頂きましたが、忘れ得ぬ想出です。

教祖八十年祭には、おやさとふしんも機械化され、七十年祭の時の様な雰囲気はなくなった様に思います。八十年祭に向っては西のやかたが普請されましたが、この時はもう工事関係者以外は余り立ち入らないようとの事で工事が進められました。又天理綜合駅が完成したのも八十年祭前で、昭和四十年九月一日今まで別々の所に有った国鉄(今のJR)丹波市駅と近鉄天理駅が一つ所に寄せられ、駅名も天理駅として竣工しました。あれからもう四十年が過ぎました。八十年祭には全国から百数十本の臨時列車が天理に押寄せ、新設された天理駅引込線には待機する団体列車で一杯でした。輸送掛一年生の私も一生懸命御世話取りをさせて頂きました。

西のやかたは八十年祭期間中は宿舎として使用され終った後は、天理よろづ相談所憩いの家との名称のもとに、国内有数の設備を誇る総合病院として発足したのは皆様御承知の通りです。

教祖九十年祭には、私にとりましては修養科一期講師の大役を仰せつかった年で、おやさとふしんには関係なく、色々と勉強をさせて頂いた年でした。昭和五十一年六月一日から八月二十七日まで修養科第四二二期一〇九組を担任させて頂きました。修養科に出る前に、一期講師としての心構えや組係の選任について、経験豊かな大教会役員先生から色々アドバイスして頂き、そのお陰で女子の組でしたが、組係の選任もうまく決り良い人ばかりに囲まれて、三ヶ月を無事につとめさせて頂く事が出来ました。任期中にありました第二十三回子供おぢば帰りでは、期間中に或る日大夕立があり雷がゴロ〱方々で落雷、団体列車は途中で立往生、天理市内は水浸し北大路をマイクロバスで走ったらステップまで水がきたとか、或る詰所では庭の池の鯉が皆逃げたとか、雷は天理市内で四十数ヶ所落雷したとか、雷様の団参だネと云った程大変な一日もありました。帰る予定の団体が列車が動かない為に一日おくれてバスで帰ると云う一幕もありました。兎に角一期講師を無事につとめさせて頂き、久し振りに我が家に帰った直後に、北礼拝場放火事件が起りました。昭和五十一年九月一日の事です。修養科とこの事件忘れる事の出来ない想い出です。

火水風

匿名

〃火水風は一の神〃子供の頃祖母からよく聞かされた言葉です。その頃は何のことかよく分らなかった。生きとし生けるものこの御守護なくして生きてはいけない。ただ、この御守護があまりにも大きすぎてピンとこない。当り前と思っているのは、人間という動物だけかもしれない。

一粒の米も、一本の大根も人間には造れない。その成長を助けるのが人間の作業にすぎない。米の中には〃三宝様がござる〃といって、昔の人は一粒の米も大切にした。福岡県の民謡の中に〃米という字を分析すれば、八十八度の手がかゝる〃というのがある。一粒の米を作るのにそれだけの手間がかゝったのである。何で粗末にできようか。

今はどうか。御承知の通りである。〃もったいない〃という言葉がいっとき死語になったが、今は世界語になろうとしている。笠岡詰所のあちこちにも〃もったいない〃が貼ってある。いち早く取り入れた詰所主任の見識の高さを思う。(一寸スリバチとスリコギ)

小学校の給食の時間、子供達はいっせいに〃いただきます〃という。その言葉にイチャモンをつける親がいるという。「金を払っているのに何で、いただきますと云わねばならんのか」こんなアホ、バカ丸出しの親が居る以上、日本は良くならない。〃いただきます〃の本質を知らなければ、そんな無教養の言葉が出る。そんな親に育てられた子供も又、無教養の人間に成長するだろう。〃美しき国日本〃には遙か遙か程遠い。アベさん。

さて、火水風は地球上で狂っている。大洪水、大旱魃、熱波、温暖化現象等々、これらは人間の傲慢さが原因ではなかろうか。地球という親神様の体を、人間が食い潰しているとしか思えない。文明の発達と背中合せに破滅という陰が、ピタッとくっついているのだが、便利さ豊かさの前に人間の欲望を剥出しにして生きている。早かれ遅かれ、神の鉄槌が振り降ろされる日が来るのではなかろうか、そんな気がしてならない。

それはさておき、身近かな自然現象をみてみたい。夏の陽が山の端に落ちる頃、田圃の畦にしゃがんで稲の葉先をじっと見ていると、陽が沈むと同時に、尖った葉先にポッと水滴が現われる。その水滴は葉先という葉先にポッ、ポッ、ポッと無数に生まれてくる。そして残照に映えてキラキラ、キラキラと、まるで宝石のように光り輝やき、神秘の世界ファンタジイの世界へと誘なってくれる。ここにも火と水の御守護をみることが出来る。この現象は科学的には説明できるが、そんなことよりそこに自然の摂理の妙なるを想い、親神様の懐を想う。

私達は多忙な日常生活の中でも、そんな身近かな、様々な現象に目を向けてみてはどうだろうか。空を見る、雲を見る、山を見る、花を愛でる。豊かな心でありたいと思う。

【14】人の心を軽快にするおしゃれな言葉

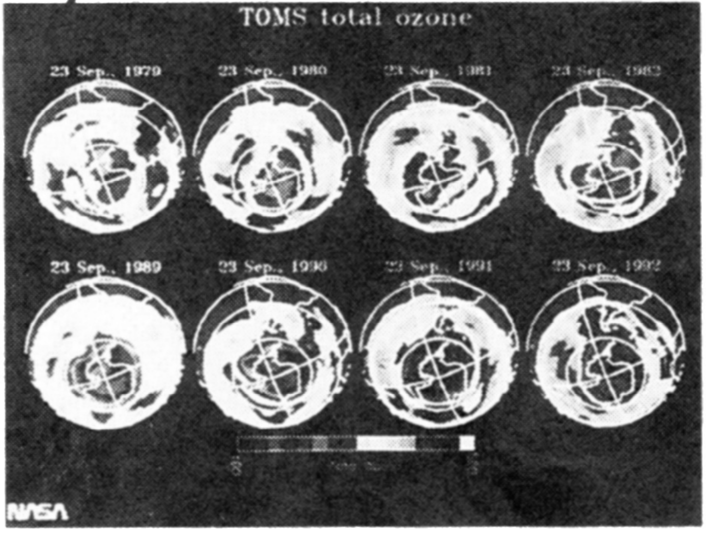
「皮肉は人の心を刺し、ユーモアは人の心を明るくする」。ある人の言葉です。皮肉や嫌みは、人の心を地面にピタッとへばりつかせます。そこを、ほんの少しでも浮かせると、人の心は軽快になるものです。褒め言葉やユーモアは、相手の心を浮かせる、そんな役割があります。家族の間でサークル内で、ギスギスするより、みんなの心は軽やかなほうがいい。欠点があり、届かないところのあるのはお互いさま。少々のことには目をつぶって、弾んだ言葉を掛け合いましょう。そして勇ませ合いたいものですね。

天理教ホームページより　http://www.tenrikyo.or.jp/ja/top.html

天理時報

第２回 成層圏からの眺め

〝オゾン層の破壊〟親神の暗示は何か



立教156年3月7日号

天理大学教授　上原豊明

オゾン層の破壊が取り沙汰されている。オゾン層は成層圏にあり、地球を有害紫外線から防御している。これが破壊されると、皮膚がんの増加、免疫力の低下などの健康被害に加え、農作物の収穫減少や海洋プランクトン減少など、さまざまな影響が懸念される。

昨年十月五日付の『ジャパンタイムス』は、南極上空のオゾン減少に関するＮＡＳＡ（アメリカ航空宇宙局）の調査結果を発表。添付された一九七九年から八二年にかけての模試図と、八九年から九二年の図（写真）を比べると、かなりの速度で破壊が進んでいる。報告では「全北米大陸に匹敵する面積」だという。

同紙はさらに十一月二日付で、世界気象機構の調査結果に基づく記事を掲載。オゾンホールは二千三百平方キロの大きさで、米国本土の三倍。過去数年間に二五パーセント大きくなり、広がりは南米大陸の南端にまで達しているとした。

また、ホールは気象変化によって移動もする。一九八七年には、オーストラリア・メルボルンの上空に到達。同国の天気予報では、成層圏のオゾン・レベルに関する報告もあるとか。

先に述べたように、オゾンが失われれば、地上の生物は有害紫外線にさらされる。これに、近年問題となっている地球の温暖化が加わるなら、将来の予測は実に厳しいものとなる。

人類は地球レベルで協力し、子孫のために考え行動すべきである。世界環境会議が数次にわたり開かれ、フロン生産の全廃が決められたのは、人類の将来への確かな前進ではあろう。

地球は一説では、四十六億年ほど前に生まれた。その後、海と陸ができ、海中には藻が発生。水によって有害紫外線から護（まも）られながら生物が生まれた。陸上には植物がはびこり、そこから発散された酸素が雷などの放電を浴びてオゾンを生成。有害紫外線から地表が保護された後、ある生物は地上の生活へ移行した。人類も、こうして水中の住まいから地上の世界に展開した生物の子孫である。

〝親神の体〟としての地球世界は、単なるぬくみや食物の恵みだけでなく、目に見えぬ成層圏という高空のオゾンによっても護られている。この事実に気づく時、人間世界への守護の深さを感じずにはいられない。それは〈陽気ぐらし〉へと進む、自然界のバランスと調和にも見て取れる。

この調和を破ったのは、長い地球の年齢からすればわずか数秒といわれる人類の営み。しかも、一七六〇年代、英国に始まった産業革命の落とし子、近代文明の負の側面である。

人類は近代化とともに、自己の快楽を求め、便利さを求めて科学技術を発達させてきた。これは、ひとえに人間の自己中心的な思慮の産物にほかならない。しかも現在、人類はその影響範囲を宇宙空間にまで広げようとしている。

そんな時代、天理教徒は何を、どう考えるのか。親神は何のために人間世界をつくり、啓示されたのか。さらに、オゾン層の破壊など、さまざまに見せられる親神の暗示は、何を指し示しているのだろう。

いまこそ、人類がエゴをむき出しに歩んできた歴史を謙虚に振り返るべき時ではないかと思う。神によって生かされ、世界を〝親神の体〟と知る天理教徒が、まず自己の信仰を掘り下げよう。そして日常の生活を見直し、与えられた物や知恵を、他に先駆けて、環境破壊にならない用い方に改める努力をしてはどうだろうか。それもまた、信仰実践の一つのあり方ではあると思う。

兄の遺稿に寄せて

大教会役員　上原繁道

最近小松左京氏の「日本沈没」第二部を読んだ。B五版二段組 活字が小さくて読みにくかったが、結構何とか読み終えた。

内容は、第一部で国土を失った日本民族、のその後の変容が、民族・文化・国の成り立ちを中心に据えて、地球温暖化と寒冷化(将に地球の現実の問題)という大きな天変地異の中で、まことに事細やかに描かれていて、興味深かった。

兄・上原豊明が一九九三年に天理時報に毎月一回の連載をした事がある。社会随想「道と世界」で高橋定嗣氏(当時 草梁分教会長「国内の話題」担当)と国内、海外の事情を種々の事件を元に、お道の者がこう考えたらいいのではないか、という問題提起の文章であった。兄は「世界の話題」の担当であった。それを、かさおかに再掲するというので、その前文を依頼された。

兄の文章に目を通しながら、私は「日本沈没」第二部の問題提起に酷似している事に気づいた。小松氏はSF作家であり、あまり宗教に関心はないようであるが、真の宗教は、民族、国家を超えて人類のものである事を考えると、天理教を信仰するお互いは、日本を沈没させてまで問題提起した小松氏の真意を、現に今、世界各地で頻発する諸問題を通して、今少し真剣に考えてみなければいけないのではないか、と思う。地球の現実の深刻な問題の前に、国が民族が争っている場合ではない、その点を、国土を失った日本・民族がどう対処していくのかという設定で、誠に興味深い問題を、小松氏は扱っているのである。

ながながと書評のような事を書いて申し訳なかったが、兄の文章に改めて目を通しながら、お道の教えは、将に国・民族を超えて人類のものではないか、という思いがしたのである。

学生の頃、もしぢばが海底に沈んだなら、なんて事を真剣に友人と議論した事があるが、お道の教えの理は、それを前提にして説かれているのではないだろうか、という気がしないでもない。

兄の専門は日本神話の研究であったが、おやさと研究所から発行された「Tenri Journal Of Religion」十五巻に掲載された「The Shinto Myth －Meaning・Symbolism・And Individuation－」にも一民族の神話から普遍を見いだそうとする姿勢がみられる。時報に掲載された小文を通して、兄の、日本という一地域に偏らない考え方(それは国際的というより人類的というべきか?)に気づいてくだされば、そしてそれが真のお道のよふぼくの考え方であるべきではないかという思いを持って頂ければ、有り難いと思う。

▼養徳社発行『陽気』誌十月号、「道柳」より転載

▽今回の課題は「真」、選五十九句中、笠岡に繋がる教友の方一名、一句が見事選ばれ掲載されていましたので転載させて頂きます。おめでとうございます。

地位　東悠分教会前会長夫人　田林美智子

きびしくも有難きかな真の道

◆第２回 笠岡大教会 親睦大ソフトボール大会

一昨年、大教会長様から「大教会内で余り各会を超えて一堂に会す機会がない、是非ブロックごとの親睦を深める会を開いて貰いたい」と言うことで第１回ソフトボール大会が開催されました。

前回は１０チームがエントリーし１７０名ほどの人が集まり賑やかな大会を持つことが出来ました。

今年は第２回目として、１１月２３日（祝）に開催することになりましたので、以下のスケジュールで行ないたいと思います。

【期　　日】　１１月２３日（祝・木）

８：３０	**大教会集合・出発**	
９：００	**茂平運動公園**	
	遥　　拝	
	大教会長様あいさつ	
	開会あいさつ	
	競技説明	
	（選手宣誓）	
９：１５	**プレイボール**	
１１：００より	昼　　食	
１５：３０	**閉 会 式**	成績発表
		表 彰 式
		挨　　拶
		遥　　拝

【エントリー】　チーム分けは、直Ｉ（淺野明教）、直II（神昭：渡邉隆夫）、福山（福満：福島大介）、高屋（秀平元一）、島根（雲東：三代温生）、久松（中村剛史）、上下&府中市（山野弘実）です（括弧内は各チームの担当者）。

こぞってエントリーしてください。

その他不明な点、ご質問等ございましたら、大教会中村義太郎、或いは、上原志郎までご連絡ください。

【参 加 賞】　１チームの中に女性や子供も参加できるようになっておりますので、婦人会員・女子青年層・少年会員もお誘いの上、ご参加下さい。

なお、参加者全員に参加賞。又成績の良かったチームにもトロフィー・盾・景品を用意しております。

大会運営委員会

第７８８期修養科募集要項

＊修養科期間

立教１６９年１２月１日～立教１７０年２月２７日

＊教　養　掛

３ヶ月間　田　中　隆　之　（大教会役員・福 山 分教会長）
１ヶ月目　吉　岡　孝　彦　（芦 品 分教会長）
２ヶ月目　津　森　朋　之　（簸ノ川分教会長）
３ヶ月目　高　橋　徳　行　（亀田山分教会長）

＊募集要項

・志願者は、１２月末日現在で満１７歳以上で、下表の必要書類を携え、上級教会を経由して大教会に順序参拝すること。
・１１月２５日までに笠岡詰所に入所し、教養掛の面接を受けること。
・３ヶ月の修養期間を修了後は、大教会での修養科修了講習会を受講し、3月1日の昼食後に解散。

＊教　科　書（必須）

『おふでさき』、『みかぐらうた』、『天理教教典』、『稿本天理教教祖伝』、『よふぼく手帳』。

＊参　考　書（出来れば持参）

『おてふり概要』、『なりもの練習譜』（笛・打楽器または三曲）、『おやしき・史跡案内』。

＊携　行　品

おつとめの扇、筆記用具、認印、笛（男鳴物の講義で笛と小鼓の内、笛を選択する人のみ）。

＊服　　装

ハッピ及び帯・バンド、長ズボン（又は、それに類するもの）、靴。

書　　類	大教会	詰所	備　　考
「順序参拝票」	○	○	
「別　席　願」	○	○	・「初席願」の順序参拝がまだの者で、修養科入学後に初席を運ぶ者のみ。
「席　　札」		○	・願書に日付を入れない事。
「別席のしおり」	○	○	・おさづけの理拝戴願の順序参拝も合せて行なう。
大教会　御供	○		・「別席の誓いの言葉」は別席の誓いの日までに覚えること。
本　部　御供		○	
「おさづけの理拝戴願」	○	○	・「おさづけの理拝戴願」の順序参拝がまだの者のみ。
「おはなし」	○		・願書に日付を入れない事。
大教会　御供	○		
本　部　御供		○	
「修養科入学願」		○	・御供は任意であるが、慣例により、２００円以上。
「修養科入学事由書」		○	
修養科入学御供	○		
「住民票」または「戸籍抄本」		○	・「戸籍記載事項証明書」、「身分証明書」でもよい。

九月月次祭祭文

これの笠岡大教会の神床にお鎮まり下さいます親神天理王命の御前に会長上原理一慎んで申し上げます

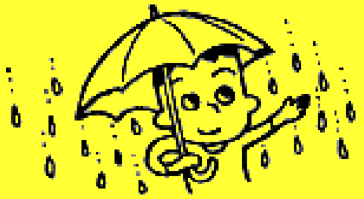
親神様の子供かわいい一条の慈しみ深い親心によります御守護とお導きを頂いて日々は結構に恙なく生活させて頂いております　取り分け今は猛暑も和らぎ朝夕はめっきり涼しくなり蝉の鳴き声から虫の音に変わる等過ごし易くなったばかりでなく稔りの秋食欲の秋とも言われ身体にも心にも大変優しい季節を迎えさせて頂いております事は誠に有難く勿体ない極みでございます　親の働きに喜びと感謝の心一杯の私共は少しでも御恩に報いさせて頂きたいものと日々は朝夕に御礼を申し上げつつつとめとさづけを通してにをいがけにおたすけにと勤め励ませて頂いております

その中にも今日の吉日はこれの名称の理にお許し下さいました月々のおつとめをつとめる御祭日でございますので只今からおつとめ奉仕者一同喜び心も一入に明るく陽気に勇んで座りづとめてをどりをつとめて九月の月次祭を執り行なわせて頂きます　残暑の中も厭わず今日の日を楽しみに御前に寄り集いました道の子供達が相共にお歌を唱和し日頃の御高恩に改めて御礼申し上げる状を御覧下さいまして親神様にもお勇み下さいますよう御願い申し上げます

さて教祖年祭のこの年おぢばの声に添うべく「一年間を通しておぢばを賑やかにしよう」と申し合わせ今日まで一所懸命実動に励んでまいりました　中でも「毎月一千人のおぢばがえり」を目指して二月の教会長講習会で「一教会毎月十名以上のおぢば帰り」を誓い合いつとめてまいりましたところ数の上では残念な月もありましたが皆が心を一つに揃えてつとめてこれた事を喜ばせて頂いております　後三ヶ月余りですが新しい人をおぢばに誘うべく先ず今月末の全教一斉にをいがけデーには今まで以上ににをいがけに歩ませて頂く所存でございますし来月は大祭月ですので直轄教会への大祭参拝を実施し年頭の心定めを再確認すると共に今日までの歩みを振り返り新たに残された月日の更なる実動を誓い合いたいと存じます

何卒親神様には今さえ良くば我さえ良くばの世の風潮に流されず真実の親を慕う神一条に歩む皆の真実誠の心をお受取り下さいまして万たすけの上に尚も自由の御守護をお現わし下さり親心に触れ共にたすけ一条に邁進する人が弥増しお望み下さる陽気ぐらしの世の状が一日も早く実現しますようお導きの程を一同と共に慎んで御願い申し上げます

【15】雨が満遍なく注がれるように



神様のご守護とはどんなものか、と問われれば、ちょうど天から降る雨のようなもの、どこに隔てなく人間の上に降り注がれている、と答えましょう。両手をそろえて差し出せば水がたまるように、天の恵みも心で上手に受けたら頂けます。ところが、両手の指がキチンと合わさっていなければ漏れるように、心にスキがあると受けられません。それは、あれが好き、これが嫌いという、好き勝手の心といえましょうか。満遍なく注いでくださるのですから、私たちも好き嫌いなく、まず受けることが大切なのです。

天理教ホームページより http://www.tenrikyo.or.jp/ja/top.html

秋季霊祭祭文

これの笠岡大教会の祖霊殿にお鎮まり下さいます本席様の御霊初代真柱様並びに奥様の御霊二代真柱様の御霊中山家御先祖の御霊大教会創設の祖上原佐吉大人八重刀自の御霊初代会長上原さと刀自の御霊二代会長上原伊助大人光刀自の御霊三代会長上原繁雄大人くにゑ刀自の御霊四代会長上原郁雄大人の御霊大教会草創の頃より歴代会長と共にご苦労下さり今日の礎を築いて下さいました役員部内教会長教人よふぼく信者の御霊諸々の御霊の前に会長上原理一慎んで申し上げます

祖霊様方には親神様教祖のお見定めにより身上事情を通して早くからこの道に引き寄せられ真実の親を知り喜びと感謝の心一杯に只御恩報じとの思い一筋にひたむきにたすけ一条の道を歩まれました　今日のお道の結構な姿をお見せ頂いておりますのはひとえに親神様教祖の御守護お導きの賜である事は申すまでもありませんが又一つには祖霊様方のそうした我欲を忘れ御恩報じに徹しきられた真実の伏せ込み理作りのお陰と日々は朝夕に御礼申し上げつつその思いに一歩でも近づかせて頂きたいものと届かぬながらもたすけ一条の御用の上に勤め励ませて頂いております

その中にも今日の吉日は秋の霊祭を執り行う定めの日柄でございますのでおつとめ奉仕者並びに部内教会長代表者一同只今は親神様の御前にててをどりをつとめさせて頂きました　ゆかりある人々も共に寄り集い事改めて御霊様方をお偲びし御礼を申し上げたいと海山川野の旬の物を供えて拝み奉る皆の真実の状を御覧下さいまして御霊様方にもお喜び下さいますようお願い申し上げます

さて教祖年祭の年も残すところ三ヶ月余りとなってまいりました　おぢばの声に応えて「一年間を通しておぢばを賑やかにしよう」を合言葉に今日まで成人の歩みを進めてまいりましたが御霊様方には大変お目怠い点もあったろうと思いますが残された月日今まで以上に頑張らせて頂きますので温かくお見守り下さり旬に相応しい成人の御守護を頂けるようお力添えの程をお願い申し上げます　又今や時代は親は子の為に子は親の為にの時代から親も子も自分の為にの時代に変わって来ているように思われそれを証明するかのような事件事故が多発しております　改めて御霊様方のみちすがらを思案し親孝心の大切さを思い起こし次の塚に向かって成人の歩みがより確かなものになるよう勤めさせて頂く所存でございます

何卒御霊様方には時代の風潮に流されず大地にしっかりと根を張り陽気ぐらし建設の大木になる事をめざして成人の道を歩む皆の真実心を御覧下さいまして皆の成人の歩みの上に更なるお力添えを賜りますよう一同と共に慎んでお願い申し上げます

大教会だより

＝教会指令＝

◎任命願

陽備 分教会
＊前任　虫明好美
＊新任　虫明立生
☆奉告祭　立教169年11月5日
立教169年9月26日承認

東悠 分教会
＊前任　田林志計實
＊新任　田林久嗣
☆奉告祭　立教169年11月3日
立教169年9月26日承認

弓ヶ濱 分教会
＊前 任　森川美雪
＊新 任　森川弘志

☆奉告祭　立教169年10月29日
立教169年9月26日承認

鴨方 分教会
＊前 任　田中照夫
＊新 任　虫明好美

☆奉告祭　立教169年11月19日
立教169年9月26日承認

◎教会長資格検定講習会修了者
前期　立教169年10月14日終講
亀田山　今川克則

◎本部保安室境内掛
自　立教169年10月1日
至　立教170年9月30日
福廣　佐々木憲彦

◎本部食堂ひのきしん
自　立教169年10月1日
至　立教169年10月15日
久松　中村剛史

訃報

三阪道輝氏
福岩分教会前会長
十月十一日出直されました。
享年　八十才

木と言うものは、どんな〝向き〟で使おうと、上下をどちらにして使おうと、効果は、一様だと思っていたが、先般こんな記事に出くわしました。

「丈夫な住宅」を建てるには、柱の〝向き〟と〝上下〟に注意して使う必要があるとありました。

〝向き〟については、日当たりの良い側には、立木の時、日当たりの良かった面を向けて使い。冬北風にさらされる側には、立木の時、日当たりの悪い面を向けて使う。これは木目と木質に関係があるようで、日当たりの良い側は成長が良く、木目と木目の間の木質が厚く吸湿性･断熱性が良いので、比較的高温に強い。これに対して、日当たりの悪い側は、成長が遅いので木質が薄く木目が細かく耐寒性が良く、比較的低温に強い。これを逆に使うと逆効果が現れ、柱は、割れ易くなるそうだ。

一方の〝上下〟については、〝上(テッペン)〟の方は、成長途上で若く年数も少ないので、木目が少なく、重さや圧力に弱い。〝下(根元)〟の方は、経年数も多いので木目も多く、重さ圧力に強い。上下を逆に使うと、柱は、折れ易くなるそうだ。

まさに、木の持つ木目の特性をしっかりと見極め、適正に使用すれば、「丈夫な住宅」の建築も、たやすく出来るものと教えられました。

ところで、当教会にも、用木(ようぼく)と言う立派な木が、何本もありますので、「丈夫な教会」つくりに取り掛かりたいと思っています。画一的な活用は避け、先ずは木目をよく確認し、それぞれの持つ特性を見極めて、適材適所に配し、堅固な組織にしてゆきたいと思っています。(さ)